

北の龍馬

～針路は北へ～

萱場利通・北海道龍馬会 理事
全国龍馬社中 副会長

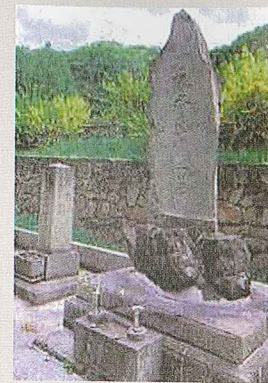
慶応3年(1867)11月、京都・近江屋で凶刃に倒れるまでの約3年間、龍馬は北海道を目指すこと4度に渡り、長崎を中心に猛烈な勢いで奔走した。まさに彼が描く“夢”を更に前進させようとする、情熱がほと走る晩年であり、彼の生き方を如実に物語る高密度な歳月であった。

最初は元治元年(1864)、黒龍丸で神戸から出発するが、途中、池田屋事件が勃発、同志望月亀弥太が殺害され、幕府よりの嫌疑を恐れて中止する。翌年、慶応2年(1866)5月には小松帯刀(薩摩藩)の協力でワイルウエフ号を購入、薩摩に向かう途中で沈没し池内蔵太など亀山社中の者12名が遭難したのが2度目。引き続き同年10月薩摩藩の保証によりプロシア商人と洋帆船・太極丸入手の手はずが整うが資金難でこれも断念、これが3度目である。薩長を越え九州諸藩まで抱き込んだ馬関商社構想が潰えたのもこの頃である。最後は翌慶応3年には大洲藩から借り受けた、いろは丸が紀州藩の明光丸に衝突されて沈没、長年の夢はここにはかなく潰えた。

薩長同盟、船中八策、大政奉還など政変の先が見えた頃より、本来持ち続けていた“海外交易”に執念を燃やしていたことが、この史実を通して伝わって来る。長崎を中心に亀山社中



坂本直寛顕彰碑と北光社農場本部跡の碑(北見市)



坂本龍馬の甥・坂本直寛乃墓(札幌市・円山墓地)



坂本龍馬の養子・高松太郎の妻・留とその息子の墓(浦臼町札の墓)

から海援隊へと具体的な活動組織が整い、これから北海道へと向かう矢先の遭難であった。

針路は北へ……、それは時代の潮流にはぐれた若き下級武士たちを救済すべく“新天地”に求めたばかりでなく、国際都市長崎や中継点の竹島開拓を念頭に置いた龍馬の国際感覚からすれば、ロシアはじめ北方圏諸国との交易も目論んでのことだったに違いない。

龍馬の“夢”を受け継ぐ

龍馬の死後、北海道への“夢”を引き継ぐ二人の甥たち(兄弟)が現れた。

ひとりには坂本家の家督を継承した龍馬の姉千鶴の長男、高松太郎(甥)である。後に龍馬の養子となり坂本直と改名。慶応4年、新政府が発足する直前に朝廷は箱館裁判所を設置。その折、高松太郎(当時27歳)改め小野淳輔に箱館在任の命が下り、やがて箱館裁判所が箱館府と改まるに至って清水谷公考が府知事に就任した。かつて太郎は京都での海援隊時代に、龍馬が説く蝦夷地開拓の重要性を清水谷に解いた経緯があった。太郎は衛士・内国事務所権判事を命じられ蝦夷地箱館府在勤となり、これを契機に箱館を中心にした新しい北海道開

拓がはじまることになる。

清水谷に見込まれた太郎は、その後、外交掛、生産方、刑法方、勘定方を兼任する中、問題が山積する本道の現状を憂いて、蝦夷地開拓の建白書を上申するまでに至る。箱館戦争後、新政府は開拓使を設置、蝦夷地を北海道に改め、11国86郡を置き本格的な本道開発に乗り出した。しかし、当時開拓次官に昇格したばかりの清水谷が突然に辞職、これに伴い太郎も箱館を去ることになる。高知に帰った彼の晩年は、キリスト教の布教に心血を注いだ。

もうひとり、同じく千鶴の次男(太郎の実弟)、高松南海男である。高松太郎に代わって坂本家を継ぎ直寛と改名。明治20年、彼は三大建白運動に参加した自由民権運動の指導者のひとりでもあり、キリスト教の伝道にも深く関わり、明治30年、農民団体・北光社を率いて北見へ入植した。その後、浦臼の聖園農場へ移り、さらにキリスト教の新聞社筆となり伝道者となった。兄・坂本直の妻、留(高知在住)が直寛を頼って浦臼に來望、現在の浦臼には留と息子の直衛の墓が建っている。